

## O-12-40

### 条件付きMRI対応ペースメーカー患者のMRI撮像時に処置を必要とした1例

高槻赤十字病院 臨床工学技術課

○中田 <sup>なかた</sup> 祐二、成瀬 <sup>なるせ</sup> 大輝

【はじめに】2012年10月より本邦でも条件付きMRI対応ペースメーカー(MRC-PM)が承認され、当院でもフローチャートを作成し2013年2月から2016年2月までMRIを13例安全に撮像してきた。当院ではMRI撮像の依頼が発生した場合、循環器内科に対診され、臨床工学技士がペースメーカー(PM)の機種確認とPMチェックを実施しMRI撮像可能な条件に合致していることを確認。結果を医師に報告しMRIの予約を行い、後日撮像する。今回当院で使用しているフローチャートを紹介すると共に、MRI撮像前に処置を必要とした1症例を経験したので報告する。

【対象と経過】2015年7月に当院で洞不全症候群(徐脈頻脈症候群)のためDDDPMが植込まれた62歳、男性。2016年2月4日腰痛により当院を受診し、整形外科より精査の為にMRIの依頼が入った。フローチャートに従い循環器内科に対診されPMチェックを実施した。チェック時患者は断続的な頻脈で、停止時には自己心拍は期待できなかった。記録からも1日8時間以上の頻脈が断続的に検出されており、心房心室/心室ベータリング率21.5/25.2%(AVdelay240ms)であった。これらからMRI撮像時のモードを非同期モード又はベータリングOFFでは、心室受攻期へのベータリング又は極度な徐脈による危険が伴うと考えられ、医師に報告し撮像を翌日として抗不整脈薬(ビルシカイニド)を投与し、頻脈が改善された段階でPMを非同期モードにして撮像を行った。

【考察・結語】今回の症例では、事前PMチェックによりMRI撮像時の危険性が予想され、これに対し処置を行う事で撮像時の非同期モードと自己脈が競合する危険を回避し、安全な撮像ができたと考えられた。昨今、緊急、待機問わずMRC-PM植込み患者に対しMRIを撮像している施設が見受けられるが、フローチャートを作成するとともに、ペースメーカーと患者の状態を十分に考慮し、安全な撮像に挑む必要がある。